

選ばれ続ける薬剤師になるために

～薬のプロだからこそ、降圧治療に貢献できること～

前編



座長 久留米大学医療センター副院長 / 循環器内科 教授
甲斐 久史 先生



講師 横浜市立大学附属 市民総合医療センター 薬剤師
菊池 雄一 先生

現在、日本には様々なクラスの降圧薬が存在しますが、それにも拘らず高血圧患者の80～85%は血圧管理が不十分とされ¹⁾、医師と薬剤師の連携による血圧管理が重要視されています。

2018年3月2日、“薬剤師が降圧治療に貢献できることは何か？”をテーマにWebカンファレンスが行われました。このWebカンファレンスの内容を、前・後編の2回にわたりご紹介いたします。前編では、高血圧の現状と降圧治療のポイントについてお届けします。

降圧薬の服薬指導にプラスのエビデンスを活用

高血圧は脳心血管病の危険因子であり、血圧が上昇するほど脳心血管リスクが上昇する傾向にあります²⁾、収縮期血圧を10mmHg低下させることで心血管イベントリスクが39.5%、脳卒中リスクが30%低下すること(図1)が報告されています³⁾。降圧薬の服薬指導では、こうしたプラスのエビデンスも活用し、「上の血圧を10下げると心臓や脳の病気のリスクが3割ほど減るデータがあります」などと具体的な数値を示しながら説明すると、患者さんのやる気も引き出しやすくなると考えています。

“厳格な降圧”のために服薬アドヒアランスを維持

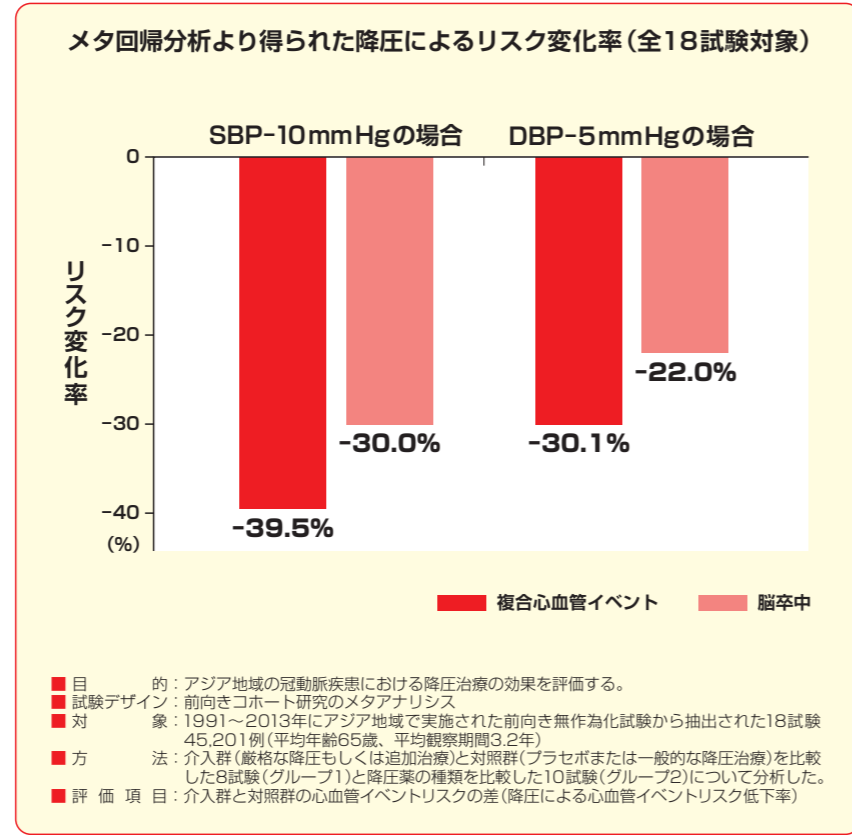
高血圧治療ガイドライン2014(JSH 2014)では、高血圧の薬物治療について、Ca拮抗薬、ARB、ACE阻害薬、利尿薬が第一選択薬であり、降圧目標を達成するには多くの場合、降圧薬の併用が必要としています⁴⁾。これは、降圧薬を併用する方が1つの薬の用量を倍にするよりも降圧効果が大きいことが示されているからです⁵⁾。ですから、なぜ血圧の薬が何種類も必要なのか疑問に思う患者さんに

は、降圧薬を組み合わせるとより大きく血圧を下げることができることをお伝えし、全ての薬を飲む必要性をご理解いただくことにより、服薬アドヒアランスの維持を図ることが大切だと思います。また、降圧目標について積極的に伝えるとともに、複数の薬を飲むことに心配や不安、飲みにくさがないかを丁寧に聴き取るなど、患者さんをサポートしていく姿勢も重要です。

“血圧変動の抑制”という処方意図もある

血圧は1日の中で変動しています。朝上昇し、夜間は下降する血圧日内変動パターンを示しますが、この血圧日内変動に異常があると心血管リスクが上昇することが分かっています⁶⁾。また、血圧変動には受診ごとの血圧値の変動もありますが、この受診間変動が大きいほど

図1 降圧治療と心血管イベントリスク抑制



Yano Y, et al. J Am Soc Hypertens. 2014; 8: 103-116. より作成

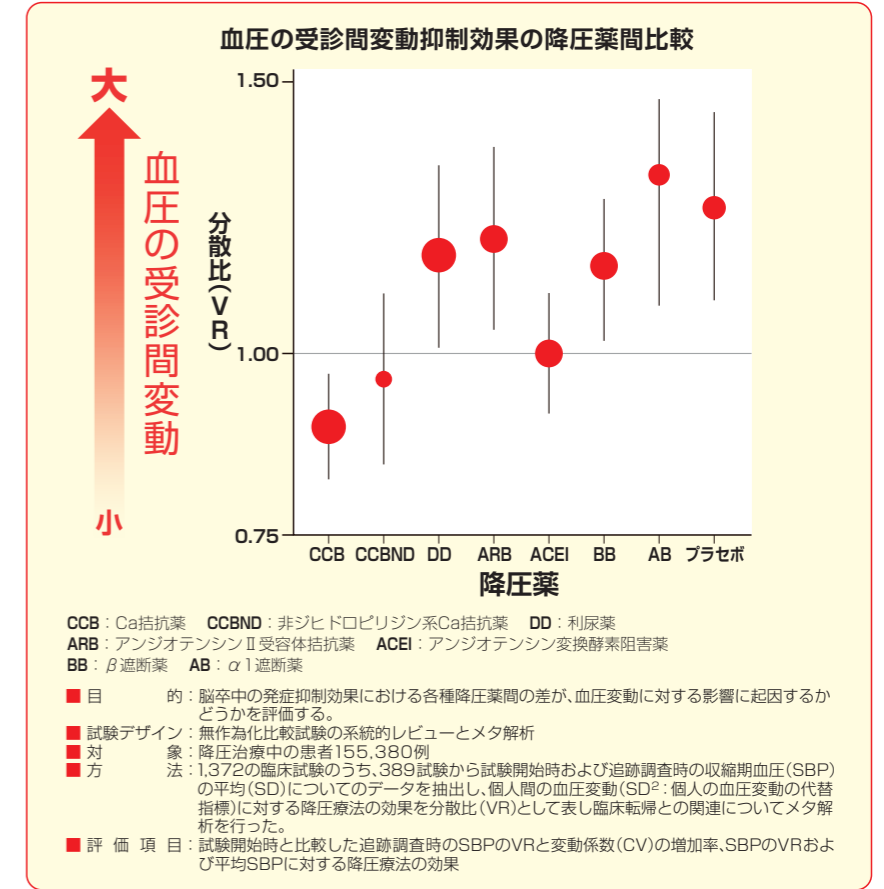
脳卒中リスクが高くなる傾向にあります⁷⁾。そのため、降圧治療では、“厳格な降圧”とともに、血圧日内変動パターン異常の是正や受診間変動の抑制といった“血圧変動の抑制”が考慮される場合があります。現在、様々な降圧薬が選択可能ですが、だからこそ医師がどのような視点で降圧薬を選択したか考えていくことが重要です。

Ca拮抗薬の処方意図を踏まえた服薬指導

JSH2014では、ジヒドロピリジン系Ca拮抗薬は、現在用いられている降圧薬の中で最も降圧効果が強い、と記載されています⁸⁾。ARBはCa拮抗薬と併用することで降圧効果が増強するとの記載もあり⁸⁾、“厳格な降圧”を目的としてCa拮抗薬を中心とした薬物治療が行われています。また、Ca拮抗薬は他の降圧薬よりも血圧の受診間変動が少ないことが報告されており(図2)⁹⁾、このことから、血圧変動抑制を目的とした場合、Ca拮抗薬が有用な治療選択肢として処方されることもあります。

Ca拮抗薬のなかには、長時間作用を持続させるために製剤学的に

図2 降圧薬が血圧の受診間変動に与える影響



Webb AJS, et al. Lancet 2010; 375: 906-915.

工夫された製剤もあり、ジヒドロピリジン系Ca拮抗薬であるアダラート® CR錠もその一つです。このように製剤学的特徴を有する薬剤においては、薬のプロであるわれわれ薬剤師による服薬指導は重要であると考えています。

後編では、Ca拮抗薬の特徴をはじめ、“厳格な降圧”“血圧変動の抑制”に加えてポイントとなる“服薬タイミング調節”についてもご紹介いたします。(後編は2018年6月号にてお届けします)

甲斐先生コメント

日本の高血圧の現状や、降圧薬を処方されている患者さんへの服薬指導について、具体的な例を交えつつお話しいただきました。血圧コントロール不十分な患者さんが半数以上という現状の中、厳格な降圧と血圧変動抑制というポイントを押さえた血圧コントロールを行っていくためにも、薬剤師からの適切な服薬指導や服薬サポートは欠かせないものだと思います。高血圧と降圧治療のポイントを分かりやすくまとめたツールもあるので*、こうしたツールを服薬指導にご活用いただき、薬剤師による降圧治療への貢献度をさらに高めていただければと思います。

* Adalat.jpでは薬剤師の先生向けの服薬指導ツールがダウンロード可能です。

薬剤師の先生向け服薬指導ツール

「循環器病を防ぐ! 高血圧治療とお薬について」は、**Adalat.jp**よりダウンロードまたはリングファイル版の請求が可能です。是非ご活用ください。



ダウンロード版 リングファイル版

こちらのQRコードからアクセスしてください。



- 1) 島本和明. 血圧 25. 2018; 60-61.
- 2) Fukuhara M, et al. J Hypertens. 2012; 30(5): 893-900.
- 3) Yano Y, et al. J Am Soc Hypertens. 2014; 8: 103-116.
- 4) 日本高血圧学会高血圧治療ガイドライン作成委員会編: 『高血圧治療ガイドライン2014』: ライフサイエンス出版: p45.
- 5) Wald DS, et al. Am J Med. 2009; 122: 290-300.
- 6) Ohkubo T, et al. J Hypertens. 2002; 20: 2183-2189.
- 7) Rothwell PM, et al. Lancet 2010; 375: 895-905.
- 8) 日本高血圧学会高血圧治療ガイドライン作成委員会編: 『高血圧治療ガイドライン2014』: ライフサイエンス出版: p49-50.
- 9) Webb AJS, et al. Lancet. 2010; 375: 906-915.